ダム湖に去る村

ミタニ　ヨシノブ
深谷　照葉

人物

ダム湖建設賛成派

村長　男。五十代初。

徳子　婆さん。

花枝　婆さん。

文男　中年。役場の吏員。

―

秋子　婆さん。

明美　婆さん。

ダム建設反対派

正三　爺さん。

五郎　爺さん。

梅男　爺さん。

春夫　婆さん。

ナボミ　赤ちゃん。

千代　姿さん

阿部　中年男。県庁職員。

学者　中年女。民俗学の学者。

時

晩秋の午前。晴天。

場所

春夫の家と前庭。

背景は紅葉の山である。空は青い。

家は母屋と納屋が接続され、コ字状の隅がある。家の後に大きな柿の木があり、赤い実がたわわに実っている。

座敷の戸は開かれ、縁側にエジコが置かれナホミが寝かされる。エジコの横にバグ、ケトルがある。

庭の下に作業台が置かれ、おムツと洗濯物

2

が干されている。

あらすじ

喜劇である。老人達の言動を笑い、その後に、心に感激するものと黄試して頂きたい。

ダム湖建設のため、赤春、村を立ち退く事になっており、村を去り難い老人達は冬籠りをしようとしている。

春夫は娘から頼まれて、赤ちゃんのナホ

この春夫を始めた。赤ちゃんを見に村人が集ってドラマが起きる。肥桶を担いだ老人、火葬場に夫の死体を運ぶ婆さんが来る。県庁から火葬の視察に来た役人、民俗学者は死体が跳び上るびっくり箱に驚き失神する。ショックで死とされ、火葬場に運ばれる直前、黄試を回復する。

村長はダム建設賛成派と反対派の仲直りを模索している。村人の心をまとめるため、おくらきんいゆう、天突き体操、赤ちゃんの

お冥参りを行なう。

老人は自由奔放な恋をする。65才以上が3000万人以上の現在、舞台で演いられる老人の恋愛は共感されるだろう。

ダム建設は、国や県の計画ではなく、老人の孤独死によって村が死に絶える前に、村を高く売り付けるための村長の策略であったと暴露するドンデン返しで幕を開いる。

日本民族は2000年以上掛けて、河口から源流に到達した。20世紀末から、源流から河口に向って下がり始めた。このドラマは下り始めた状況を舞台で記録するものである。ダム湖のコンクリート壁は到達した足跡を標示する。

4

幕は閉じられている。
春夫が唱う子守歌が聞える。
子守歌
ねんねや　こんこや　たんころや
おまえの母チャン　どこ行った
髪盛り上げ　つけまつげ
キャバクラ嬢で　働いでる
もうすぐ冬だよ　雪が降る
雪が降ったら　戻れない
雪が降りたら　町へ行く
歌の途中から幕が開らかれる。
春夫はナホミを抱いて、歌いあやしながら舞台を回る。
春夫　あら、あら！
ナホミを持ち上げると小便が滴る。
急ぎ足に縁側に行く。
春夫　服一杯飲んでここ眠ってこっこ
ナホミを座布団に寝かせ、バグから
おむつを出して交換する。ナホミをえ
じこに入れ見詰める。頬をくすぐる。横

にケトルが置かれている。

春美　笑った。可愛い。

千代と学春登場。千代は力メラを携帯している。

千代　おはよう。春美ちゃん。

春美　おはよう。お千代さん。

千代　赤ちゃんを見に来た。

春美　見てくれ。

学春　おじゃまします。

春美　遠慮は要らぬ。

学春　ありがとうございます。お言葉に甘えて、お気に障ることもお許ねしますが、どうかよろしく。

春美　なんでも聞いてくれ。

千代　この学春は答えとうないことでも知りたがるので、横で聴いていてハラハラする。

春美　学問のためなら役に立ちたいが、根性が汚いとぶん殴る。

千代　研究に生命を掛ける覚悟と言っておる。

春美　それなら協力する。こんな山奥までよ
　　つ来てくれた。一人住いをすれば、なん
　　でもしゃべりたくなるものじゃ。
　　千代と学春はナホミを見詰める。
千代　可愛い。
学春　まあーっ！可愛い。
春美　子を産んどるかねぇ。
学春　出産しておりません。
春美　せではない。
学春　えっ？

（　　）

春美　子を育てぬ世は嫌いじゃ。
学春　ここここ
春美　子を産んだことの無い世が可愛いと言
　　っても、ほんとうの可愛さは判らぬ。
学春　おつしゃられることと、判ります。
千代　可愛い顔を撮っておこう。
　　カメラを向け角度を変えて撮影し、
　　春美にもこちらを見せる。
春美　可愛い。
千代　えくぼが深い。

春美　せのうまいや。
千代　その興に乗ることは間違いなし。
春美　外車に乗れるようになればよいが。
千代　名前は？
春美　ナホミ。
千代　どんな字いや？
春美　聞いとらぬ。
千代　今時のキラキラネームいや。
学者　目が大きくて少女コミックのカバーガールか女優になると思うよ。

春美　そう育ててみせる。
千代　ミミええとミミこの村に赤ケヤニが
　　来たのは、ずーっと昔のミミ赤ケヤン
　　を最後に見たのも、ずーっと昔。二十年
　　くらい昔かな？
春美　もっと昔いや。
学者（唱う）今日は赤ケヤン（手を伸ばす）
春美　触るなーツバを掛けるなー
学者　エッヘー
春美　下って。

学者は後へ下がる。

春夫　微笑を移つされる。

千代　この辺りは南極のようにさむいじゃ。その上、医者が居らぬので用心する。気を要るくしないで。

学者　すみません。

春夫　人を見たら病人と思え。どこの馬の骨ともわからぬ者に用心する。

千代　この方は学者ですよ。

春夫　知っとる。あの大事故から後は、学者は信用できぬ。嘘吐きじゃ。心が汚れておれば体も汚れておる。

千代　あの事故と関連した学問ではなくて、日本民族はどんな暮らしをして来たかを調べる民俗学の学者じゃ。

春夫　そんなものは、暮らしに役立たぬ。

千代　この村がダムの底に沈む前に、どんな暮らしをしていたかを調査されようとしている。

春夫　それならワッチ等を利用する御用学者

学者　村の人々を利用する考えはありません。御用学者ではありません。

千代　ワッチ等のことを考えてくれており、御用学者ではないから、ワッチは写真撮影で協力しとる。

春夫　村中をほつつき歩き、見たり聴いたり触ったりするのは我慢するが、病気を移されるのは困る。

学者　不注意でした。すみません。

春夫　赤ナヤシを無料で見るのかい？土産はどうしたい？

千代　持って来た。

学者　ナホミの前へ連れて来て、しやがませる。千代もしやがむ。

千代　こうして。

額に手を当てナホミを見上げる。

学者は千代を見て同じ動作をする。

千代　見上げた。

春夫　ありがとさん。喜んで貰っとく。人に見上げられる人物に育つ。

千代は学春をさちらせて、少し後へ下る。

学春は不審そうに千代を見る。

学春　あのう、よく判りませんがて、

千代　土産を催促したので（額に手を当てて見上げ）こうして見上げた。この村には土産を催促するような厚かましい者は居らぬ。これは、たわけいや。

学春　そうでしたか！ユーモアですね。

春笑　小笑だから町へ行くことも、町から来ることもなかったので、土産に強く笑かれた。（よつちゆう、土産の巻り取りをしている町の者には判らぬほどの効果がある。

学春　昔からの額を手に当て見上げる。これをやっていましたかて、

春笑　ずーっと昔からいや。

千代　この巻り取りは、子供の頃に覚えた。

学春　村に取りましては、すばらしい遊びの発見です。

7

春美　コロンブスの上に驚いておる。

千代　たいしたことでもないことを、大袈裟に言うのが学者。

学者　民俗学にとっては価値があります。

春美　そんなものですか？　ワッチには関係の無いこと。

千代　村中に知らせねばならぬ（口にチを当てる）オーイ。

山彦A　オーイ。

千代　ホチャニが来たぞう。

山彦A　ホチャニが来たぞう。

山彦B　ど、こ、にゃ？

千代　春美婆チャン所。

山彦A　春美婆チャン所。

千代　これで村内山彦放送は済んだ。後は歩るける者が押し掛けるだけ。その前に撮って置こう。

ナホミを撮影しモニターで確しかめる。

春美は肩を動かし肩凝をせわしくし

て辺りの匂いを嗅ぐ。

千代　臭い！

体を回して匂を嗅ぐ。

松男の声　ホイサッサ、ホイサッサ。

春美は下手を指差す。

春美　松男義サンいや。風と共に来たる。

千代　あれは、好い映画でやった。

春美　高校の英語の先生は「風と共に去りぬ」を「風と共に去りぬ」と訳せると教えてくれた。

―――

受者　すばらしい先生です。

松男は手拭いで頬被りをし、肥桶を前後に天秤棒で担いで登場。拍子を取ってリズミカルに歩き、桶を立て上下に動かしている。

松男　ホイサッサ。ホイサッサ。

春美　そっちに置いてくれ。

松男　ホイ！

春美に指された場所に肥桶を置く。

春美　なつかしい香りがする。

千代　畑に撒くと、田舎の香水になった。

梅男　屋敷の化粧品売り場と、そっくりじゃ。

春夫　修学旅行で頭が痛くなった。

学者　とっても斬新な感想です。そのような見方があることは、此所に来るまで判りませんでした。

春夫　町の人は、腐ったウンコの匂いを知らぬ。大事な肥料だったことも知らぬ。

千代　そんな奴等に村を取りトッられた。

春夫　腹が立つ。此所から追い出される。

梅男　ワッサも、腹が立つ。戦って負けた。

千代　怒りをしずめてくれ。ここ赤ナヤンを見てくれ。

梅男　そこを通った時、放送を聞いたので、赤ナヤンを見に来た。

春夫　あっちから大回りして、下から近寄ってくれ。

梅男　ホイ。

春夫　色いに驚いて目を覚ます。

松男は服の汚れを調べる。手拭いの頬被りを外し振り被る。袖の匂いを嗅ぐ。

松男　あまり付いておらぬ。

春美　ストップ！そこまで。それ以上近寄るな。回虫が移る。

緑側に置かれたバグの内から、トイレットペーパーを出し、小さくちぎって丸め、鼻に詰める。以下鼻の詰った声となる。

春美　見てくれ。

松男　可愛いのう。

春美はペーパーを千代に渡す。千代はペーパーをちぎって受け取る。千代と受け取ペーパーを丸めて鼻に詰める。千代は受け取からペーパーを受け取り、松男に差し出す。

松男　無駄じゃ。口から入る。

千代はペーパーを春美に返す。

春美はペーパーをバグに入れる。

11

千代　その年で肥桶を担ぐのは年寄。何代になった。

松男　年寄りに年を聞くな。

春美　頭も元気そうじゃ。

千代　目は達者かい。

松男　よく見えるナホミを見詰めるし赤い。

千代　赤いから赤ナヤシと言う。

松男　名前はいい。

春美　ナホミ。

松男　心に響く名じゃ。スナックのママさん

の名前がナホミじゃった。

千代　何ニミスナックのママと同じ名だと

ママ

松男　はっきり聞こえぬ。

千代　本日は晴天なり。本日は晴天なり。

松男　感明度不良。

以下、三人の女性は話す時に身振を

外し、話し終ると身振をする。

春美　町へ行ったのかい。

松男　下調べに行った。

13

春美　村営アパートへ行ったのかー

松男　ワッチに聞いゴてられたアパートに泊った。

春美　裏切り者！

鼻栓を外して松男に向って投げる。

緑側に行きトイレットペーパーを手にするが、考えを変えてバッグに入れる。

干された洗濯物からピンチを外し鼻をはさむ。前髪を持ち上げ、目尻を吊り上げ、顔を上げ胸を張る。シンクロナイズドスイミング選手のように大きくチを振り大股に歩く。

松男　キイを渡されとるので使った。ホテル代を節約した。

春美　春まで入居しないのダム建設反対派の意地じゃ。なんで根性を見せなんだ。

松男　若い頃、都会のアパートに憧れた。どんなものか泊ってみたかった。

千代　ワッチ等は村に残って、村で暮らせて行くための運動に参加した同志ではなか

ったのかー

梅男　時代は変った。大きな川の流れをせきとめるようなもので、ワッチ等の力ではどうしようもなかった。

春美　言い訳・見苦しいぞ。

梅男　ワッチも年を取った。体も心も劣えた。自分の思いこの村では暮らして行けぬ。孤独死をしとうない。

学者　話の腰を折ってすみません。村営アパートはどんなものでしょうかー

千代　村をダム工事に明け渡した後、村民が入居するために、町に建てた村営のアパートいや。

学者　判りました。すでに入居している家族も居られるのですかー

千代　居る。賛成派が、家屋敷を放ったらかしにして、これ見よがしに入居した。そんな奴等と同い屋根の下にはすみとうない。

春美　此所の敬をアパートで討ってやる。

春美　オマハンが賛成派にやらかしたことを
　賛成派は決して忘れぬ。
松男　あれは面白かった。詰襟にしてくれる
　と嬉しくてたまらぬ。満蒙ホームランを
　打ったような痛快いや。
千枝　テレビで何十回も放送された。見る度
　に涙が止まらないほど笑った。
松男　ワッチを見て、ギョッとした。またや
　りに来たと思った苦いや。
学者　ありゃ、どんなことでしょうか？

千代　ダム建設の公聴会で、賛成派とお役人
　に向って、こやしを振り掛けた。
学者　ナーッ？
春美　松男義さんは、肥桶を高く持ち上げて
　"ようく見とれ"と言って、頭から糞と
　小便とかぶって"反対派の糞垢離"と言
　い、お役人を追い回した。
松男　その通りじゃ。「悪いことをしとらぬ、
　またやんと言うものだから二月もブタ箱
　に入れられた。飯は旨かった。

15

春夫　松男様とは英雄じゃ。

千代　英雄は孤児でなければならぬ。子の世話にだまされるな。

松男　親と子じゃ。情は通じる。

春夫　子は、親が補償金を無駄使いしないようにする。

千代　親が持ちなれない大金を持つと、子はたからずには居れぬ。

松男　ワッチの子は、そんな悪人ではない。

春夫　ワッチは、どんな子か知っとる。

松男　前会社に変っとるのは間違いない。

春夫　お話を聞いていて、私も二人のお嬢さんと同じ意見です。心配です。余計な口出しをするのですが、家族や親類から親切にされてもお金を渡さないと、逆に親切にされることを知って頂きたいのです。

松男　金を渡せば親切にされる。老後の面倒を見て貰わねばならぬ。

千代　（唱う）金を無くした年寄りは、裏の

施設に捨てましょうか　エイエイ　てれはあたりまえ。

春美と学春は拍手。

松男　家族を捨ってはいかぬ。町の人は皆親切いやった。

学春　スナックのナホミママさんは、とても親切だったでしょうー

松男　あんなに親切されたのは初めてじゃ。山の女は言葉が汚い。

春美　タワケ！

17　17

学春　危い！

千代　その格好でスナックに行くかー

松男　風呂に入って、背広に着換える。

千代　その格好でも、肥桶に尻を入れて行けばモテる。

春美　その格好、ワッナは好きいや。

千代　ママさんに見せたい。

松男　それは駄目。ワッナは肉牛の放牧をやっとると話してある。

春美　茶色のカツラを買っただろうー

松男　携帯電話も買うた（懐から出す）町では便利いや。何所でも誰とでも話せる。

千代　成金の山猿が町でやらかしていることは、筒抜けに聞えて来る。

松男　他人の悪口を言わぬのが町の暮らしいや（電話を懐に大切そうに入れる）

千代　此所は山奥。悪口を言うて何が悪い。

春矢　山の男らしい男に戻ってくれ。

松男　そうする。山の男に戻って仕事に戻る

千代　なんで、こやしを運ぶ。

―

松男　雪が降る前に便所を空にするのが昔からの仕来り。

千代　雪になれば、診療所に寄り集って冬ごもりをする。家の便所は使わぬのでそのままにして置けばよい。

松男　そのままにすることダムの水に溶け込む。

千代　溶け込んでもかまわぬ。

松男　ワッチの黄小便を都会の住民に飲ませることになる。

千代　他人の迷惑いらん。都会の奴等は水道から出

や蛙の糞小便を飲んでおる。

学者　エーッ！そんなことありません。

千代　川から水を取っているり川には魚や蛙が棲んでいる。

学者　（かし、それは極めて微量で浮化消毒されているので衛生上問題ありません。

千代　入っていることに間違いない。

学者　何故、それほどまでに、川の水の浮化にこだわるのですか？

梅男　昔から川の水をちゃぬうに教しこられて来た。

千代　川下の村は川の水を飲むからいや。川下にはワッケ等の本家があるからいや。

春夫　あの峰々まで人は住めぬ。ここが行きどまり。積った雪は田植えの水となる。

梅男　ワッケはこれで。

千代　待った。肥桶担ぎの写真を撮りたい。

学者　に向って（要るだろう？

学者　ハイ。貴重な記録になりますので、是非。

千代　松男青年団長、肥桶を担いで下さい。

松男　ホイ。

春美　肥桶を背負って坂道を上る若者は働き者と、娘達は見惚れたもんじゃ。

松男は手拭いを取り、音を立て絞り直し、身繕いを整える。肥桶を担ぎ柄杓を持ってポーズを決める。

松男　これでよいかな？

千代　パッチリ。

三人は拍手する。

春美　カッコイイ。

千代は撮影し、親指を立てる。

千代　肥桶の外に付いた物に注意がある。

千代は鼻栓を外してポケットに入れ松男の周囲を回って撮影する。

千代　どの角度から撮っても絵になる。

モニターを見る。

春美はモニターを見る。

春美　イヨーッ！色男。肥桶担いだイケメン

さん。田舎の元祖氏。

千代　頭は光って、地下足袋もナウい。紐帯は百姓の黒帯。

学者にもニターを見せる。

学者　とってもすてき。貴重な資料、ありがとうございます。

千代　背景は紅葉の山と青い空。空気がとってもきれいな田舎の風景。

春夫　昔は、どこでも見られたもんじゃ。

千代　団長、歩るいて下され。

松男　ホイ。

調子を取って板杓をトントンと動かして歩るく。

千代は後向きに歩るきながら撮影。

松男（唱う）お山の百姓はホイサッサ　肥桶担いでホイサッサ　坂道昇ってホイサッサ。

下手に退場。

三人は整列して見送りを振る。春夫と学者は帽子を外しポケットに入れる。三人は顔を上に向け両手を開いて

深呼吸。

春矢は鼻をぴくつかせ、松茸山の方向に鼻を向ける。

春矢　松茸の匂いがする。今年は豊作じゃ。

千代　松茸じゃ。匂うかえ、

学者　いいえ。

千代　都会は、人間の鼻も目も耳も弱くなるようじゃ。

春矢　松茸山おろしが吹けば、秋の終りのもうすぐ冬になる。

22

千代　冬ごもりになって、黄戎派と暮らすようになれば、松男爺さん、また何かをやらかすよ。

春矢　黄戎派と目の敵にしとるから、ただではすまぬ。

千代　村長は仲直りさせようとしとるが、黄戎派の親分の言うことをきく筈がない。

学者　それでは仲直りできませんね。

千代　仲直りしなともよい。弱い者が仲直りをしたがる。強い者は、詫びてもタクル

ために仲直りしたがらぬ。

学君　驚きました。こんな小英のお婆ケキンが国際政治的感覚を持っておのれる。

千代　仲直りは出来ぬもの。村長はこれが判っておらぬ。仲直りさせようと小細工をしとるが無駄なことじゃ。

学君　お婆ケキンの政治批評、すばらしい！

春美　学いは好まぬが、仕掛けて来れば叩きのめしてやる。

猟銃の発射音。

山彦　猟銃の発射音。

春美　五郎義さんが猪を射った（指さし）

千代　一回出来た。秋深し　猪撃った　音がした（指を折って数える）

春美　小学生以下じゃ。

千代　下手が好い。上手は空しく下手は心に届く。

春美　五郎義さんの鉄砲撃ちを下手な俳句で詠むのは失礼じゃ。

千代　義さんのファンであることは動かぬと

24

る。

春美　狩りの神様いや。

千代　用もないのに小屋に出掛けるのを見たぞ。

春美　村の中では、どこで誰が何をしたかは見えるもの。隠しごとはしとらぬ。

学者　どの辺りで射ったのですか？

千代（指差す）あそこいや。小屋で寝泊をしておれば、畑を荒らしに来る。

学者　人間を怖れないのですか？

春美　動物愛護で、お動物様に手出し出来ぬと知られてしまった。

千代　人間を襲った熊を射ち殺さず、お客様扱いをした。そこで一句　平和ぼけ三回威かす　熊一頭

学者　あらー、下手な俳句って判りやすい。

春美　やさしい家チャンと思われたいから、鉄砲射ちを止める。

千代　婚活パーティで鉄砲を持っていることが知られて、パーン（胸で両手を交差）

春夫　昔は、熊が出ると男達は仕事をほったらかして獲りに行った。

学春　村を守るためですか？

春夫　熊は高く売れる。肉はうまい。

学春　遠く離れていて見えませぬ。何故、猪を撃ったと考えましたか？

春夫　この前は居ないやった。

学春　えっ？　ここ順番に撃つのですか？

春夫　そういや。同じ肉を続けて食べたら飽きるだろう？

学春　獲物が多い人ですか？

春夫　そういや。春間から群である。

千代　人間が馬鹿にされとる。

春夫　肉が食いたければ、小屋に行って好きなだけ切り取ればよい。

春夫　セルフサービスじゃ。

学春　100gいくらですか？

春夫　無料じゃ。この村で獲れた物は敵味方なく無料じゃ。

学春　金がないと無くなるのでは？

26

千代　他人の分は残すもんじゃ。
学吾　信じられまセん。
千代　後で貰いに行こう。
　　村長と補償要求。保償は従僕のように
　　に村長の影に隠れて、三歩後を歩く。
村長　今日は、春美さんチャン。
春美　あっ、今日は。まだ生きておるのかネー
村長　お千代婆さん今日は。
　　千代は臭臭と嗅いだように鼻先で手
　　を左右に振る。

―――

千代　汚い奴が大勢来ると空気が汚れた。臭
　　さくてかなわぬ。近寄るな。
　　村長は無視する。
千代　あれがあるなら、
春美　裏の柿の木に吊ってある。
　　千代は家の裏へ行く。
村長　赤チャンが転入してくれるのでお礼と
　　お祝いに来た。赤チャンは久し振りじゃ
　　。一寸見せては下さらんかネ。
春美　どうぞ。

村長はナホミを見る。

村長　見渡せば判る通り、この村は子育てに最適の環境じゃ。

春美　最高じゃ。

村長　どなたの子じゃマー

春美　オマハンの実の孫娘じゃ。ようく見ろ。似とる。

村長　そう言われてみるとそう見える。ウッナの孫娘になる。明日、今夜にも文男を来させて転入届を提出して置こう。

春美　手間を煩わせならぬので、頼みます。

村長　転入届より大事な儀式がある。大勢に集まって貰って、氏神様にお参りして村の氏子と認めて貰わねばならぬ。

千代　高麗な村長が氏神様をアパート横のちっぽけな祠に移してしまった。

村長　ウッナ様の氏神様は偉い神様ではない。閑じゃ。呼んだら、すぐ戻ってくれる。神様は祈り物が要らぬ。職務移動して頂けるる。

27

春美　神や仏を信じては居らず而も罰を受ける。罰が当るぞ。

村長　通院バスは間もなく出発する。買物手帳に必要な物、ミルクやおムツを記入して文男に頼んだから、

春美　頼んである。

村長　それなら安心。

千代　お爺さんは孫娘にお祝いのプレゼントするのは、とっても嬉しいらしい。

村長　その通りじゃ。考えるだけで楽しい。

―補償はナホミを見ようとして前に出る。―

春美　不幸の者ノ下れノボンドルには見せぬ。補償は後へ下り、村長の背後に隠れるようにさつ。

村長　もう済んだこと。許してやって下され。

春美　こ奴は補償金欲しさにこの村に来て反対運動にかつた。反対派では補償金を貰えぬと判ると、賛成派に寝返つた。裏切り者。欲深の汚い奴。許さぬ。

28

千代は大きな剣が胸に打たれたわら人形を持って現れる。剣で人形の胸かえぐる。

千代　村長死ね！村長死ね！

村長　初めの頃は腹が立った。気色が悪かったが、何人もに十年以上呪われても、この通り元気じゃ。

千代　間もなく、これにしてやる。

右手を前の高さで小刻みに振り、左脚を伸ばし、左足を外に回転して、不自由な歩き方を演じて見せる。

村長　どんなにやっても案子木ほども効かぬ。

学者　あのう、ここ21世紀の現在でも続けられていることは驚きです。呪っている現場を見せて頂けませんか？写真撮影もお願いします。

千代　見せてやる、ここ村長！

村長　何かな？

千代　BETTOREの写真を撮って置こう。

村長　ATTERRAは望むようなかならぬとは

思うが、
ポーズを取る。
村長　笑った方がよいかな、
千代　そうそうだ。AFTERは、みいめにとるからじゃ。
村長　それでは、ご期待にそう。
笑ってみる。
千代は撮影する。
千代　ついて来なされ。
学者　お願いします。

30

春夫　人形を役場の方に向けてくれ。
千代　そうしよう。今度こそ、役場で倒れさせる。
千代は学者を家の裏に入る。
村長は二人の後姿を目で追い、柿の木を見上げる。
村長　この家も、食う人の居らぬ柿がたわわに実っている。南の山一も、北の丸サも、一本松の屋敷の屋根は落ちて、くもの巣が張っとるが、柿の実は赤く実ってた

30

31

れいいや。

春夫は村長の横に立ち柿の木を見上げ、他家の柿の木を眺める。

春夫　村を捨てた賛成派の屋敷いや。

村長　柿は現金収入になった。

春夫　実を取る者も皮を剥く者も居らぬ。

村長　この軒の端から端まで干し柿が干してあった。渋味が少し残っていたが、やわらかいのがうまかった。

春夫　村中の餓鬼に食わせた。

二人は沈黙し追想する。

千代と少し後を学者は現れる。学者はモニターから目を離し、カメラを千代に返す。

村長（家の角を指差して）そこは日ヨリが好くて寒い北風が当らぬので、日向ぼっこに集った。

春夫　オマハニは、誰が日ヨリでで、ここに来たっ

村長　ここ初ぜいや。その赤ちゃニのお婆ナ

ナニじゃ。

春美　仲の好い夫婦になろと思った。夫婦にしようと決めていた。

村長　設ナヤニの母親は今とは違って、やさしかった。

春美　鬼婆にしたのは、オマハニじゃ。

村長　山で拾った柴束をゆでてくれた。

春美　ワッサも、ごちそうになった。

千代　ワッサ等女の子もごちそうになった。

村長　芋をむしてくれる間、ワッサ等は金の

―　―

横で待った。

春美　金やせるのが苦しかった。

千代　ごこは子供の遊び場じゃった。

春美　秋の今頃になると、そこに置いてあった薪やむしろを片付けておいた。

村長　おしくらきんじゅつが出来るように場所を作ってくれた。

千代　おしくらきんじゅうは楽しかった。

村長　あれは村の伝統行事じゃ。

春美　あのう、話に割って入ってすすまません

。おしくらまんじゅうとは、どんなお饅頭でしょうか？

千代　食い物ではない。テレビ見ただけじゃが、満員電車に押し込むような子供の遊びじゃ。

春夫　このお爺さんはワッチの娘に、ぴったりとくっついていた。

千代　思い出すと、なつかしい。

村長　子供心に村の仲間であることを肌で感じていた。

33

千代　スキンシップいや。

村長　冷えた体が暖まった。

春夫　休み時間に教室でやった。校長先生が飛び入りした。

村長　ワッチ等が。今やれば若に戻って仲良くなれる。

春夫　そうはいかぬ。

学春　あのうこの赤ナヤンが村長様の孫娘とのことですが、ご親類でしょうか？

千代は、補償を拒否します。

33

千代　この一人を除いては、村中皆親類じゃ。

学者　ハイ。それは判って居りますが。

千代　この村長は、役場の新市の頃、春美嬢

　　ナナニの姉を子ませた。

学者　立ち入ったことをお聞きするのを許し

　て下さい。結婚されたのですか？

千代　結婚しなかったから、村長になれた。

学者　ここ？

千代　村長の命令で村長の妹と結婚させられ

　た。

34

学者　少し判りました。

春美　怨んではおらぬ。好い男に恵まれて、

　所で暮らしている。あの時、結婚させて

　、姉の尻の下に敷いておけば、ダム建設

　のような大外れたことは起きなんだと、

　後悔しとる。

村長　それでもよかった。それが幸福だった

　。今頃は通院バスの運転手をしておる。

千代　それでおさまる男ではない。見るから

　に野心的にやった。この村の発展を考え

ていた。

バスの警笛。

山本　バスの警笛。

村長　通院のマイクロバスをこれまで通りに運行するには手が足りぬ。週2便に減らさねばならぬ。

春夫　それは困る。通院バスは買物バスじゃ。

千代　病院にお客様を運ぶのだから、ガソリン二代を病院から出して貰え。

村長　そうも行かぬので困っておる。

春夫　歯医者は、山から市だと言うと、すぐ歯を抜くそういやなこいか。

千代　人権侵害じゃ。差別じゃ。抗議をしろ。

村長　そうも行かぬので困っておる。

千代　首長の仕事は、泣いたり、怒ったり、抗議したり、あらゆる手を使って、県や国から金を取ることだろうて。

村長　実を言うと、ダム建設の決着がつくと、手の平を返したように相手にされぬ。

千代　騙されたのだろうて。責任を取って辞め

3！

村長　その時が来た。

代代　嘘を吐け！権力の味を覚えた者は、引きずり降ろされるまで、その地位にしがみつくものだ。

シニアカーの警笛の音。

一同は下手を見る。

徒子はシニアカーを運転しリアカーをけん引して登場。リアカーには古い型の丸い桶が積れている。桶は口ープで固縛されている。黒い布が結えられた竹竿が立てられている。釣の付いた竹竿、弁当箱、野かん、茶道具が積まれている。

花枝は徒子の後から一輪車を押して登場。一輪車には薪が高く積まれている。

徒子はシニアカーを上手よりに止めて、降りる。

花枝は一輪車とリアカーの後に止め

37

る。

徳子と花枝は、春美と村長に向って歩く。

徳子　昨夜はお忙しい中、ジャックの通夜と葬式にお出で頂きありがとうございます。昨日の夕方、大変ご迷惑を全し、今頃は三途の川の渡しで、脱衣婆さんを笑わせておると思うております。ありがとうございます（深く頭を下げる）

村長　お悲傷様でございます。

一同は言葉にならないことを言って礼を返す。

村長　後の手続きは役場が全部行いますので、ご安心下さい。

徳子　よろしゅうお願い申します。ジャックがボケる前に残した遺言通りに、死んだ後も笑わせたいと願っております。

村長　遺言通りに笑わせましょう。

徳子　仕掛けとあの世に持って行きたいとの遺言通りに、火葬にいたします。

村長　独創的で偉大なエンタテイナーであった。村民には忘れられない人物です。ダム建設賛成、反対両派の間にあって、血の雨の降る激突を緩和させた功績は歴史に残ります。ミヤックさんの遺志を受け継ぎ、村民は親しくやかに暮らすようにいたしましょう。

春夫　楽の過ぎいや。

千代　人が死ぬ話ば演説をしたがる癖は悪い癖いや。

徒子　村長様のお言葉を聞いて、ミヤックは草葉の陰で喜びます。すうがとうございます。

千代　初めて見た時は腰を抜かすが、二回目からは驚いて見せた。そして笑い転げた。

徒子　皆様からの、そんな暖い思い遣りに支えられました。厚くお礼申し上げます。

村長　お礼を申し上げねばならぬのはワッケ。ミヤックさんに非常に助けられました。

春夫　賛成派のもそきいやが、好きじゃった。

38

39

村長　許してくれた！有難い。

徒子　ありがとうございます。

春夫　ミヤックさんは格別。オマハンも好きじゃ。惚んでは居らぬ。

徒子と花枝は春夫に頭を下げる。

徒子と花枝　ありがとうございます。

春夫は礼を返しながら、徒子と目を合わせ、用件を話せ、と目顔で促す。

花枝　赤子ヤニを見せて下され。

春夫　見て下され。ここ一寸待って下され。

家に入り、塩が入った瓜（ガル）を持って現れ、大量の塩を掴んで力士のように撒く。徒子と花枝に頭から掛ける。

春夫　どうぞ。

徒子と花枝はナホミを見詰める。

徒子　まあー！可愛い！

花枝　笑った。

村長　可愛いだろうー？ワッチの孫じゃ。

花枝　孫の母親、オマハンの家の嫁に、十分なことはしておらぬ。大きな口をきくな。

千代　花枝さんは、立派なことを言ってくれた。

村長　ここ出来なかったここ

一同は沈黙。村長はうなだれる。

学者は千代に向く。

学者　お話を承っていて想像できないことがあります。

千代　何でしょうか、

学者　昨日の夕方に死亡とされ、今朝火葬されようとされておられますが、死亡診断書と火葬許可書は、どうされましたか、

村長　心配いらぬ。手続きは役場の文書が後からする。

学者　えっ、医者の死亡診断書は、

村長　他所者が余計な心配をしたらいかん。死亡診断書を貰うために、ニヤック春さんの遺体を町まで運び持ち返るのかね、

学者　ここ、ここ、

村長　運転手さん、誰か運転よろしく頼むぞ、

40

40

学者　ミミミ

村長　医者は大勢の患者の診察を止めて、老衰死した一人のために、一日掛りで診断に来てくれるのかねー

学者　ミミミ

村長　死人でいるか、生きているかは、ワリチが決める。

学者　ミミミ、えっ、ミミミ

村長　火葬許可書は、後から文男が書いて保管する。

―

学者　ミミミ

41

村長　役場で保管しなければ紛失する。村には、用紙に満足に記入出来る者は居らぬ。

学者　ミミミ

村長　村民からの申請、届書は文男が書く。役場の仕事は文男が一人で全部やる。

学者　ミミミ、そうでしたかー

文男は机部を帝国ーて登場。

村長　文男、通院バスがまた故障したかー

文男　何とか使えます。県庁から阿部さんが

41

42

来られました。

村長　遅くてくれ。首を長くして待っていた。

阿部は村長に挨拶しようとする。

村長は手で挨拶を制止する。

村長　今、村行政で最も忙しい時じゃ。一寸の間待機して下さらぬか、

阿部　ハイ。判りました。ご挨拶は後ほどに。

村長　意外に早く着かれた。曲りくねった坂道の運転に慣れておられるようじゃ。文男。

文男　ハイ。村長。

村長　死亡診断書をくれる。

文男　メモしております。

村長　帰ったら、春夫迷子センから話を聞いて、転入届を提出してくれ。

文男　ハイ。判りました。

村長　春さん迷さんは気まぐれ。あっちこっちに寄り道をしたがるが、老人への敬をとめて、言われる通りにしてくれ。

文男　ハイ。できる限り寄り道をします。

村長　遅く帰っても、やることがない。
文男　判っております。
春美　人使いが荒い。
文男　いいえ、そんなことはありません。
村長　わが村は、日本一老人福祉の充実した
　　せんきょ体いや。
文男　それでは出発いたします。
　　退場する。
　　村長は学者に向く。
村長　見ての通り、村の行政はこのように行
　　なわれる。判ったかな、
学者　ハイ。表も裏もよく判りました。
　　徒子は春美の前へ来る。
徒子　赤ちゃんを見せて貰って、元気と貰っ
　　た。ワッチ等はこれで失礼する。
村長　待ってくれ。今は寂しい秋。急がなく
　　ても落ちぬ。もうすぐ好いことが起きる
　　ぞ。あっ、それから、今ひらめいたが、
　　ミヤック春さんの遺言を実現できてうじ
　　や。徒養になる。

43

44

徒子　そう言われるのなら、恐れたして貰う。
春夫　家に入って、弟と沸かし、お茶を飲んで下さい。
徒子　それは有難い。焼き場へ行く途中じゃが寄り道をさせて貰う。
村長　ワッチも喉が渇いた。大勢が飲めるように、弟と交互に沸かして下さい。
徒子と花枝は家の内に入る。
村長　これで村のラッシュアワーは終った。この美しい村の秋に久く参られた。

阿部　初めてお目に掛ります。研修の許可を頂き有難うございます。
村長　県庁から山奥へ研修に来る理由がない。来年の春、村を立ち退かぬ者が居るか居らぬか、スパイに来たのであろう。
阿部　計画が予定通りに進捗することを第一とし、諸状況を研修させて頂くべく出張を命ぜられました。
村長　挨拶は、それくらいにして、頼んでおいた土産は？

阿部　調査して参りました。

村長　県の手帳で調査して頂いたとは、有難い。

阿部　いいえ、私が立て替えました。

村長　そうでしたか。ありがとさん。皆の衆、村民の方方、わが村へ研修に来られた県庁のお役人様からお土産を頂戴した。村長が拍手し、一同は拍手する。

村長　遠慮なく、よばれよう。

阿部　あのう、私個人が立て替えたものでございます。

村長　それなら、土産にならぬ。県庁のお役人様は県知事閣下の指揮命令下で働いておるのだろうな。

阿部　ハイ。そうではありますがミミミ

村長　お役人様は出張前に下調べをすると承知している。県知事閣下に、当村から何県、入れられたか、ご存知かな。

阿部　ミミミ

村長　ケチなことをして、県知事閣下の面子

46

を貰し、栗を失なわせてはならぬ。

千代　次の選挙で落ちたら、アニタの所為。

春夫　栗の白金柿を忘れつる。

村長　わが村は民主的であることが研修され大皆ここ白飴は、

阿部　てここにあつ、ハイ。上の箱に入っております。

村長は阿部から栗子飴を受け取り、回転焼を一個取り出し、一口頬り、内を見る。

村長　うまい、白飴じゃ。この家、よばれよう。（阿部に向って）それはて、

阿部　つぶ飴でございます。

村長　つぶ飴はお役人様から貰え。一人一個づつ、合わせて二個。

一同　ハーイ

村民は列を作り、村長と阿部が持つ栗子飴から回転焼を取り頬張る。

秋子登場。

秋子　今日は。

村長　おーっ、炭焼きの秋子婆ナヤン。お元気そうで何より。色も白くなったようで皆様もお元気そうで何よりでございます。おなつかしゆうございます。

村長　挨拶はそれくらいにして、県知事閣下から下賜された回転焼いや。恵人で召しとって下され。

秋子　ありがとうございます。

秋子　回転焼を受け取り食べる。

秋子　おいしい。

徳子と花枝は大きな茶缶と茶器を持って現れ、春夫が軍歌作業台に載せる。

徳子　お茶が沸いたぞう。

徳子と花枝は茶を入れる。

村民は列を作り茶碗を取り茶を飲む。

徳子と花枝は回転焼を取り食べる。

花枝　回転まんじゅう、うまいノノ

春夫は厨房から箱を受け取り差し出す。

春夫　アンタも、お相伴にあずかればて

阿部　女ー、ハイ、ミミしかし、ミミ
回転焼を一個取る。
春矢は作業台を指差す。
春矢　芋はセルフサービス。
阿部　ハイ。
春矢は芋ー箱を作業台に置く
村長は芋ー箱を作業台に置き一個取り頬張る。
村長　うまいー、馳走さん。
春矢は秋子に近寄る。

48

春矢　何しに来たー、此所は反対派の本部、攻り込みを掛けて来体満足で帰れると思うなよ。
千代　薄管者手帳の何級が欲しいの？
秋子　皆様とご一緒に冬を越したいと思いまして、やって参りました。お仲間に入れて頂けましょうー、よろしくお願い申し上げます。
春矢　芋三春チャンは故郷の地で死んだそうじゃないかー

48

49

秋子　あっと言う間にここに

千代　暑つさに慣れた炭焼きでも、町で暮らせば生命を縮める。

花枝　後家になって出歩くことさのて、

秋子　紅葉の山を見たくて、居てもたってもおれなくて、故里へ帰って参りました。

村長　秋子さんは村がなつかしく、皆とも逢いたくて戻って来た。いいめはこれくらいにして、仲好くして下され。

秋子　よろしく、お願いします。

村長　補佐、食ってばかりで、役にさっとらめ。

補佐　ハイ。何かて、

村長　残りは、今夜中に各家庭に配れ。

補佐　ハイ。

村長　役場の文男の分も忘れるな。

補佐　ハイ。

秋子　ジャリワは、回転炭が好きいやつた。

村長　仏様は口が利けぬことを忘れておつた。よう気がかれた。お供えしてくれ。

徳子　ありがとさん。

回転焼を取り、リアヤーに向う。棺桶に掛けられた十字の紐を解く。蓋を取り回転焼を入れる。

花枝　オマハンの大好きな回転焼貰ったよ。

徳子　腹のすとうまくなる。

花枝　仏様の横で焼こう。

徳子　ピザ・パイの金で焼くようなもの。これも一緒に焼く。

回転焼を入れ蓋をする。

学者　あのう、ジャックさんは外人さんでしょうかー

徳子　この村で生れてこの村で死んだ百姓。

花枝　地蓋地焼いや。

学者　えっー

花枝　野菜の地蓋地消の消費の消じゃが、焼は死体を焼く焼いや。

学者　ーーーーあっ、判りました。

千代　学者は一寸判り難い言葉じゃ。

徳子は村長に向く。

51

飛子　ジャックへの伏線は回転焼を伏えるこ
とかな。
村長　そんなものじゃない。遠言通りにパホ
ーマンスで伏線する。出発されては回る
。しばらく居て下さい。
飛子　村長が、そう言うのなら。
千代は菓子箱の蓋を調べる。阿部の
胸を小突く。
千代　ニヤ、アニタ。
阿部　何でしょうか？
―――
千代　蓋に何も入ってない。
阿部　えっ？何か？
千代　英代劇見て、勉強してないわ？
阿部　テレビの、ですか？
千代　そう。村長は代官様。代官様に差し出
す土産の菓子箱の蓋には、小判が敷き詰
めてあるでしょ？
阿部　ハハハ、まあ、テレビでは。
千代　村長は遊戯に金を使う。使った分を取
り返さねばならないでしょ？

52

阿部　あのう、回転焼は一個百円で、二百個買って参りました。

村長　大金を使わせてすまぬ。皆様で食べておる。ありがとさん。

阿部　あのうここお話では、買ってきてくれとのお話でした。

村長　二毒を選ぶのに迷うと思って、村民が喜ぶ回転焼を推奨しただけじゃ。

阿部　あのうこ私は代金を立て替えただけですが。

村長　二毒を渡し食ってから、金を寄越せと言うのは理屈に合わぬ。

春夫　買ってきただけなら、あんなに礼を言わなんだ。

千代　ご身分の高いお役人様が、もの笑いになるようなことをしてはいかぬ。

春夫　ゼネコンから金を貰え。

阿部　とんでもない。

千代　ゼネコンは体育館建設で建設費を水増してボロ儲けをしとる。

阿部　ニヤニヤ

千代　今からでも遅くない。公明正大に、お金を入れて下さい。

阿部　とんでもない。

春夫　貰う立場じゃなく、

阿部　とんでもない。私は公務員です。

千代　村長は県から金を取ることが仕事。

阿部　交付金とそれとは根本的に違います。

春夫　ものの判りの悪い人間には、どう説明しても判らぬ。

村長　情い、県庁お役人へのうっぷん晴らしはこれまで（阿部に向って）大人我慢されたっ。ところで、あれを見て下され。

　　指揮棒を指差す。

村長　ダム建設賛成派の広報宣伝係のミヤック。お春ナヤニのご遺体が納められ、火葬場に向う途中、ここに立ち寄られた。

阿部　ニヤあって、ハイ。

村長　担当が変って日が浅いため、ミヤックお春ナヤニを知らないのはやむを得んが

53

、県知事閣下の代理として長官の意を表して頂きたい。

阿部　申し訳ございません。知事代理の資格はございません。

村長　ダム建設で県のために貢献した故人に対し、長官の意を表わさぬお心算かな。

阿部　ミミこいいえ、そのようなミミ

村長　臨機応変に仕事をするのが、現場に立つたお役人の仕事。

阿部　ミミこ

―

千代　小更国会元議員。

村長　テレビも週刊誌も来ておらぬ。さあさあ前へ。問題にされる証拠は残らぬ。

阿部は村長に押されて槍衾に出る。

花枝　貴様をありがとうございます。

村長　よいところに気が付いてくれた。貴様を返さぬと、県知事閣下の顔に泥を塗るところいやつた。

花枝　貴様に入れ歯くとも結構です。お忘

54

と現金が大事（手を差し出す）

阿部はしぶしぶ財布を出す。

阿部　この村では、普通どの程度でしょうか。

花枝　お志は多ければ多いほど故人も喜びます。

阿部　故人もですか？

しぶしぶ五千円札一枚取り出し花枝の掌にのせる。

千枝　不札は無いのー出張手当貰っているでしょうー

―――

阿部　ここここ

村長　ありがとうございます。故人は昨日の夕刻お亡くなりなられ、これから荼毘に付されるところ。ダム建設推進の偉大な功労者にご対面下さい。

阿部　ハイ。

村長は千代に向く。

村長　お千代婆さん。

千代　何じゃー

村長　学者はジャック最ナヤンのパホーマン

56

スを知らぬなぞ、

千代　話してない。

村長　ジャック叔ナヤンの遺言を敬行する。
言っていることが判るめぞ、

千代　マッナの知能指数を知らぬのか、

村長　それでは頼む。

千代　千代は学者の袖を掴んで連れて来る

千代　民俗学の研究には、まだと思いナヤンス。ようく調査して下され。

学者　よろしいんでしょうめぞ、

―

徒子　有名な大学の先生で、初対面の貴方様に挨拶で貰えるのなら、ジャックは大喜び、間違いない。

学者　勉強させて頂きます。
千代は学者を、村長は阿部を、リアカーの左側（客席側）に導き、棺桶に向いて立たせる（客席に背を向ける）
二人を後退させないように　後に立つ
春美は村長に促されて棺桶の後に立つ
徒子と花枝は棺桶の左側に立ち、客

57

席に面する。

村長　春美婆ナヤン、蓋を取って下され。

春美　アイヨ。ワッチの心臓はドキドキ。

合掌し念仏を唱え蓋を取る。

徳子は鉤の付いた竹竿の鉤を死体の背中のロープに掛ける。竹竿を框縁の緑に掛け拯子にする。

花枝は鉤の付いた竹竿の鉤を死体の肩のロープに掛ける。ロープは両手首に結ばられている。

―　春美は蓋をする。　―

村長　もっと、おそば近くへ。

阿部と学者は前へ進む。

村長　持ち上げて下され。南無阿弥陀仏。

阿部と学者　南無阿弥陀仏（合掌）

村長　もっと、おそばへ

阿部　ハイ。

村長　目を放しますな。

阿部　ヘイ。

村長は阿部を、千代と学者を、框縁

58

に密着させ、後へ退れないように背中を押している。

村長　ソーレ。

春夫は蓋を、さっと取る。

徳子が竹竿を押し下げると、死体が跳び上り阿部に頭突きする。死体は経帷子を着て客席を向いている。徳子が竹竿を上下すると、死体は伸び上り棺に入る。

花枝は竹竿を持ち上げ、上下左右に動かすと、死体の両手は縛り人形のように動き、阿部と学者の頬を打つ。

阿部　ヒヤーッ！ミミウーン。

学者　ギャーッ！ミミウーン。

阿部と学者は後から押されているため進げられず失神する。

村長　村長と千代は二人を支える。

オイッ。子を貸してくれ。

一同は駆け寄って、二人を地面に横たえる。

春夫は盃をリアカーに載せる。
徳子と花枝は竹竿を手放す。
村長は頭部、続いて医者の手首の脈
を測り、耳を胸に当てて心音を聴く。
顔を伏せて立ち上り、首を左右に振る。
村長　心肺停止。心因性ショック死。人の命
ははかないもの。ご冥福を祈る。南無阿
弥陀仏（合掌）
一同　一同は死体の後に整列。
一同　南無阿弥陀仏（合掌）

村長　大変なことになった。殺人になる。大
勢の芸妓者は高令者。今いブタ箱で冒険
ショップの商品を作ることになる。これ
は殺人ではない。皆の衆、そうだな？
一同　そうだ。
村長　もみ消さねばならぬ。
春夫　政治家の造り方、汚いぞ。
村長　皆の衆、口裏を合わせてくれるか？
一同　合わせる。
村長　助った。村長は実況が残っていた。

59

60

千枝　村長、落ち着けて、深呼吸。（両手を開く）

村長は両手を高く上げ、大げさに深呼吸。

村長　突然の、想定外の突然死で頭の内は真っ白。コンガラガッテ、どうすればよいか考えが浮かばぬ。ご遺族に訃報を伝えねばならぬが電話番号を調べねばならぬ。正直に告白するが、この種の事務は文男に任せていたので、ワッチはどうすればよいか判らぬ。

―――――――――――――――――――――

春夫　力が無ければ村長を降ろす。

村長　文男は通院バスを運転して町に向っている。呼び戻す手段がない。見回しても役に立ちそうな年寄りは居らぬ。

千代　その通り。

村長　役場には通信費が残っておらぬ。他の事務科目を流用すると会計検査で指摘される。

春夫　立ちごとを言うな。

村長　野次られると立ち往生する。

秋子　村長さん。頑張って。

村長　ご苦労ありがとう。ご遺族が到着するまで遺体を安置しなければならぬ。ここその場所がない。ここ見張れる者が居らぬのでアライグマにかじられる。遺体が損傷すれば、あらぬ疑いを掛けられる。遺体を引き渡したら、弁護士から死因を根据り葉据り聴かれる。学校と役場は愉快訴訟人から囲い撃ちされる。困った。

千代　証拠湮滅。

61

村長　どうやってて、

千代　焼いてしまえ。

村長　（手を打つ）それしかないここ徳子婆ナニ、一緒に焼いてくれるかて、

徳子　一人焼くのも三人焼くのも手間は同じ。

村長　エコじゃ。CO2を削減できる。

砲男の声　大根、大根、大根。今年の大根豊作。ホイサッサ　ホイサッサ

土手より肥桶を担いで出登場。肥桶を置いて村長に向う。徳子に怒い視線

61

を送る。

松男　どうしたー

村長　県庁の役人が死んだ。

千枝　学者も。

村長　これから会議にする。

松男　（一輪車を指差す）それだけでは足りぬ。

村長　割り木はあるかー

松男　ある。

村長　補償。

補償　ヘイ。

―――

村長　鯖を焼いたことがあるかー

補償　蝋が焼いていた。

村長　バベキューはー

補償　あります。

村長　これから松男殿さんの家へ行って割り木と貰い、焼き場へ運べ。

補償　どうやって運びますかー

村長　自分で考えろ。

補償　ハイ。

村長　焼き場で彼ら要ナヤニを手伝え。

62

補償　えつ〜〜〜それだけは勘弁して下さい。
春夫　村長の命令に従わぬのか！
補償　それだけはお許し下さい。
千代　村長のご恩を忘れたのか〜〜村長の口癖
　　えがあったから補償金を貰えることを忘れ
　　たのか〜〜
補償　ご恩は決して忘れません。
春夫　それなら、今すぐご恩を返せ。
補償　ここ怖い。
村長　欲は深いが腰抜けいや。役に立たぬ。

補償　その代り、何なりと命令して下さい。
村長　春きでに三人は死ぬ見込み。三人分の
　　ブナを切って割って焼き場の物置に、井
　　桁に積んで置け。
補償　それなら、何とか出来ます。
梅男　この野郎、ド頭をブチ割ってやる。
村長　許してやってくれ。補償金目当に村に
　　移住した人間の屑。ド頭をブチ割るほど
　　の者ではない。
千代　村が困っている時に助けぬのは許せぬ

秋子　ワッチが手伝います。
村長　それは有難い。火の扱いはお手のもの。
松男　ワッチも手伝う。
村長　死体は重い。松男春さんなら、お手のもの。
春美　徳子逝ナヤンのそばに居たいんじゃ。
秋子　煙突を掃除すれば、燃えはよくなる。
　秋子と松男は徳子の近くにすつ。
村長　さすがに炭焼きじゃ。目の着けどころが違う。

―

秋子　炭窯とは違って、内が見えるのでいいお骨に焼きとります。
村長　その通りじゃ。
徳子　人を焼いた経験があまりないので、よろしくお頼み申します。
村長　わが村はこうして助け合って来た。これからも仲よくできる。さてこの仏様を運ばねばならぬ。徳子逝ナヤン。
徳子　アイヨ。
村長　役人をジャッワ春さんの橋の上に座ら

わたしは貰えないから

徹子　扇風いやが、文句を言うまい。

村長　春夫婆ナヤン・ここから出根する。よろしく頼みます。

春夫　延慰いやが、仕方ない。

村長　三味線はあるかい、

春夫　そんな物はない。モッコで運べ。

村長　それはよい考え。

春夫　延慰いやが、出根の準備をしよう。

村長　頼みますぞ。補償、手伝え。

補償　ハイ。

春夫の後から補償は家に入る。

松男　大根、大根、大根貰ってくれ。

千代　どーれ。

肥桶から大根を一本取り出し、目の高さに持ち上げ匂いを嗅ぐ。

松男　無農薬、無化学肥料、完全有機肥料栽培の大根、うまいぞ。

徹子は肥桶から大根を二本取り出し、根桶の内に入れる。

65

村長　松男爺さん、大根ありがとさん。皆の衆には、緊急事態対処後に、受け取って頂く。

松男　ホイ。

村長　力持ちの助けが要る。

松男　ワッチに任せろ。

村長　役人とジャック爺ウヤニの跡の土家をたい。

千代　待った。

村長　何いやー

千代　遺品を遺族に返さねばならぬ。

村長　気が付かなんだ。遺品を灰にすれば、あらぬ疑いを掛けられる。

千代は周囲と学者のポケットから財布、携帯電話等を取り出し、指環と時計を外し作業台に並べる。

村長　お千代婆さんの助言で村の名誉が失しなわれずに済んだ。

補償はモッコと竹の棒、者夫は物を入れたかンボール箱を持って現れる。

66

67

以下、作業は同時進行となる。

村長　それを、そこに敷いてくれ。

補償はモッコと竹の棒を、リアカーの後に少し離して置く。

春夫と千代はダンボール箱から白いハンカチ二枚を取り出し、三角形に折り、派手な腰ひもに縫い付けて三角巾を作る。

徒子はダンボール箱から腰ひも二本を取り出す。花枝と秋子は徒子を手伝う。

徒子　補償・手伝え。

補償　ヘイ。

徒子は子春の上体を起こす。

徒子　倒れないように背中を押せ。

補償　ヒヤーッ！

徒子　ヤレ！

花枝は補償を蹴る。

補償は目を閉じ横を向いて片手で子春の背中を支える。

花枝と秋子の両手を胸の高さで合掌させる。徳子は手首に腰ひもを巻き縛って、余ったひもを前に回して縛る。しばらくすれば固まる。

徳子　春美と千代は三角巾を学者の頭に巻く。余ったひもを後頭から垂らす。

千代　ハンカチ学者じゃ。

春美と千代は合掌し念仏を唱える。

村長は松男を阿部の頭の側に立つよう動作で示す。

村長　肩を持ってくれ。

松男　ホイ（阿部の両脇を持つ）崩壊然が残っとる。

村長は阿部の両膝を持つ。

村長　セーノ。

二人は阿部を持ち上げ、尻から棺桶に入れる。両膝から下と両脇の上が棺桶の外に出ている。

村長に続いて松男は手を叩いて、汚れを落とす。

68

69

徳子、花枝、秋子は阿部を合掌させる。

春美、千代は三角巾を着ける。

春美　旅立ちの経帷子を着て頂けぬのは申し訳ないが、こうすれば仏様らしゆうなられた（合掌）南無阿弥陀仏。

全員　南無阿弥陀仏（合掌）

千代　ワッチ等が出来る精一杯のことをしたご遺族には満足して頂ける筈。撮影をしておこう。

―阿部と写真を撮影する。―

春美はダンボール箱から壺とガラスびんを取り出す。

村長　それはなー

春美　ラッキョウ漬けのびんと梅干しの壺じゃ。

村長　何に使うー

春美　骨壺に使う。

村長　偉い！！一を頼のば十をやってくれる。気の利く先輩に助けられて　この困難を

70

来り切れそういや。
春美は徒子にビンと壺と手渡す。
徒子はりアカーに載せる。
村長　松男春さん。人間は石と違って落とすかもしれぬ。試してはいかがさらぬかぞ、
松男　ホイ。
学者の後に立つ。
松男　ドリ。
学者を支えている補償に代り、学者の尻の下に手を入れ持ち上げ、モッコに載せる。
千代　仏様らしゆう座らさねば。
あぐらをかいて座らせる。
松男　倒れぬように持って下され。
竹の棒を持ち、モッコの前後の縄を束ねて持ち、竹の棒を通す。
松男　補償、前棒を持て。
補償は、ほそうた竹の棒を持つ。
松男は後棒を持つ。
松男　担ぎー

二人は肩に担ぐ。

松男　行くぞ〜ミミホイサッサ　ホイサッサ

ホイサッサ　ホイサッサ。

二人はモッコを担いで舞台を一周して、元の位置に戻る。

松男　松男は竹の棒を外しモッコを開らく。

補償　倒れぬように持て。

村長　ヘイ（弁膳で座り、片手で支持する）

松男　どうかね〜

補償　補償は頼りないが、右とか運べる。

村長　それはよかった。ことは順調に進んでいる。

春夫　春夫はケトルを持って来る。

村長　道中、喉が渇く。赤坊の水を。

そうしてあげろ。昔からそうして来た。

春夫　春夫は河部の口にケトルの先を入れ

河部　水を注ぐ。

河部は水にむせる。手足をばたつかせ起き上ろうと暴れる

助けてくれ。助けてくれ。

71

72

春美は阿部を指差す。

春美　ヒヤーッ！幽霊！

婆さん達は悲鳴あげ、パニックとなって家に逃げ込む。

村長は逃げようとするが躓みとびまる。

補償は学者を支えていた手を放す。

学者は横向きに倒れる。

補償は立ち上り逃げようとするが、足がもつれ転倒する。腰が抜け這って家に逃げ込む。

村長　松男叔さん。幽霊が暴れとる。取り押さえてくれ。

松男　ホイ。

枷枸を取り阿部に近寄り、阿部の頭に枷枸をかぶせる。

阿部　どけて下さい！

手足をばたつかせる。両手首を縛れた手を胸と額の間を上下させる。

五郎登場。狩猟服を着て猟銃を肩に

掛け服にサバイバルナイフを差している。

五郎　どうしたべ

村長　幽霊が出た。

五郎　どこにべ

村長　そこ。松男叔さんが押さえている。

阿部を指差す。

村長　撃ってくれ。オマハンは村を守る自警団長。

五郎は銃を下ろし胸の前で保持し、

阿部を見詰める。

五郎　あれは幽霊じゃない。人間じゃ。男じゃ。足が有る。

村長　向って来るかもしれない。向って来れば撃ってくれ。

五郎　ホンモノなら撃っても死なぬ。

阿部　見えぬ。とけてくれえ。助けてくれえ。

五郎　助けてくれと叫んどる。助けてやったらどうじゃ。

阿部　オーイ。村長さん。村長さん。ここから

73

74

出られぬ。出してくれ。お願いします。

五郎　知り合いかい、

村長　県庁の役人じゃ。

五郎　それなら、放っとけ。

村長　それは困る。松男様さん。

松男　ホイ。

村長　手伝ってくれ。

松男　ホイ。

松男は竹竿をぐいと押し下げると、阿部の体は持ち上る。ジャックの上体も持ち上る。

村長は肩を阿部の肩の下に入れて持ち上げ下に下ろす。

阿部の体重がジャックに掛うないので、ジャックの体は反動で飛び上る。

阿部はジャックを見て気絶する。

村長は阿部を支える。

松男は村長を助けて、阿部を地面に座らせる。両手首と首に掛けた縄を解く。頬に軽い往復ビンタ。

75

松男　オーイ。起きろ。

阿部は意識を回復する。

阿部　ワーッ！

松男　落ち着け。

阿部は放心状態で首を前に下げて動かない。

村長　突然、暴れ出すかもしれない。その時は押さえてくれ

松男　ホイ。

（柄杓を持って横に立つ。）

村長は家の前に立つ。

村長　幽霊ではないぞ。出て来い。

五郎は銃を肩に掛ける。

婆さん達は現れ、阿部を見る。

補償が現れる。

村長　政は深いが、服装ケいや。

花枝　男の奇つた奴。男を辞めろ！

春美は五郎に駆け寄り、腕を掴み額を五郎の肩に当てて甘える。

春美　とつても怖かつた。

村長　学者も助ければ生き返るかもしれぬ。
春美　婆ちゃん、ここAEDはあるかな、
春美　それ、何のことじゃ？
村長　ワッチは女性の心臓マッサージが得意じゃ。
千代　やらなくてよい（周囲を見回す）チ伝って。
　婆さん達は学者のそばに集り、チ首と首の縄を解き、三角巾を外し、体を横たえる。

千代はケトルを持って来る。

村長　春美婆ちゃん・チ伝ってくれ。
春美　ワッチは忙しい（五郎を見上げて）猪射ったの？
五郎　横網みたいのを仕留めた。
春美　どこ、射ったの？
五郎　頭（こめかみからこめかみに抜ける動作）弾は貫通した。
春美　分りの名人。分猟の神様。解散します。
五郎　目の前に来て、デカイ面をするから外

76

しようがない。

春美　今夜も来るでしょう。すき焼きそれとも
ボタン鍋。どちらがお好きー

五郎　どちらでも、両方でもよい。

春美　よかった。
口を大きく開いてはほ笑む。回転焼
を取って来て手渡す。

五郎　うきい！

春美はお茶をいれて、湯呑みを渡す。

五郎　うきい！

―

千代は学者の口にケトルから水を注
ぐ。
学者は水にむせて一体を起こす。

77

千代　生き返ったぞう。
婆さん達は見守って居て拍手。

学者　私、どうなっていたのー

千代　閻魔大王から入国を拒否され、この世
に強制送還された。

学者　エーッ　ここ違います　ここ　マーッ
（泣きじゃくる）

78

村長　取り乱すのは当り前。
花枝　都会の女はワッチ等と泣き方が違う。
村長　お役人様はどうなったかな？
　　阿部の前に立ち、松男に尋ねる。
村長　具合は？
松男　戻りかけている。
阿部　あのう、私、どうかしましたか？
村長　死んでいた。
阿部　エッ？
　　立ち上り、棺桶を見て怯え、離れる。
　　頭にチョキやり三角巾を外す。
阿部　臭い！この鉢巻きは何ですか？
村長　ユニホームじゃ。焼かれる者は必ずかぶることになっておる。わが日本国の古来から守られて来た風習じゃ。
阿部　とんでもない。私は失神していただけです。
阿部　いや、死んでいた。完全に心肺は停止していた。
阿部　誰が、そのように診断しましたか？

79

村長　ワッチいや。

阿部　とんでもない。貴方は医者ではない。

千代　医者でも誤診して患者を死なす。医者ではない村長が誤診しても不思議ではない。

阿部　とんでもない。法律はそんなことを許さない。

千代　とんでもない。法律は選挙違反で当選した犯罪者の国会の先生方が作ったもの。

阿部　とんでもない。村長は医者いやない。

花枝　それなら、お尋ねしますが、生きているか死んでいるかを、誰が診断するのですか。

阿部　医者です。

村長　この村は無医村。どんな医者でもよいから、医者を一人寄越してくれと、何百回も県に頼んだ。

阿部　それとこれとは別。

花枝　お役人様は、仲間の失策を庇う悪い癖がある。

80

千代　アンタは、生命を助けられたのに感謝していない。感謝の心を失ったら人間失格。赤坂の水を飲まして貰っていなければ、アンタは今頃、お骨になっていた。

阿部　貴方達と話をすると、血圧が200以上にはね上る。気が狂う。

村長　へらず口を利けるまでに回復したようじゃ。早速、学者を落ち着かせて貰う。ワッチ等と坂長が合わぬ。

阿部　どうかされたんですか？

村長　貴方とご一緒に焼き場に運ばれるところじゃった。

阿部　とんでもない。ダム建設とは無関係のあの方まで火葬にしようとされたんですか？

徳子　お骨を間違って拾わぬように、少し離して焼く心算じゃった。

阿部　エーッ。

花枝　子供の頃から悪戯をやっている秘子婆ちゃんが手伝ってくれることになって

いた。そうだよな、秋子さまヤシ。

秋子　澄んだ音のする備長炭並みに焼いてあげたのに、残念。

村長　お聞きの通り、ワッチ等は殺切いやが誤解される。都会人と都会人なら話が通じる。学者の面倒を見ては下さらぬかな、

阿部は千代に促されて学者の前に立つ。

阿部　どうしたんです

学者　怖ーいー

千代　怖がるな、学問に命を賭けのだろうな、

学者　それとこれとは別。

千代　貴方の言うことは、コロコロと変る。ワッチ等には、さっぱり判らん人。皆の衆、そうだろうな、

一同　そうだ。

村長　言い争いをしては、なお長くする。春美さ、ナヤシ。

春美　何じゃ、ワッチは忙しい。

村長　忙しいようにみえぬが。二人を家の

82

内に入れて安静にさせたい。家の内に入れさせて下さらぬか？

春夫　ワッサはチが放せぬ。お千代婆さん、頼む。

春夫は以後、五郎の傍を離れない。

千代は学者と阿部を作業台に連れて行き貼布箱を指差す。

阿部は内ポケットを探り左手首を見て貼布と時計を取り身に着ける。

千代は学者の貼布時を持ち、二人を先導して家に入る。

正三は大きな箱を背負い、両手に箱を下げ重い足取りで登場。

村長　正三爺さん今日は。好いお天気です。お頼みを聞いて下さって、ご苦労さん。

正三　ここをすぐ立ち去れ！町へ行け！

村長　そうしたいが、残って後始末をやらねばならぬ。村に残っている全員に診療所に集って貰って冬ごもりをせねばならぬ。春子は全員元気で引き越さねばならぬ。

正三　雪が積れば逃げ場はないぞ。生きて冬は越さぬ。（笠を下ろす）

村長　雪が積って、暖房に集って貰って話せば仲直りできる。

正三　中がいいことを言うな。

村長　正三義さんの、そのような強い正義感のおかげで村の松茸山は荒らされずにすんだ。今年は大豊作。

正三　大豊作どころいやない。超大豊作いや。あたり一面が松茸。松茸を踏んで足を滑らせた。

村長　正三義さんの泥棒退治のおかげ。

五郎　熊と間違って、ライフルを撃ったこ、こっ、こ命中しなかったこ、こうフ。

正三　命中しないように射つのが難しい。

村長　見せて下され。

正三は笠を並べる。

一同は笠をのぞきこむ。

村長は正三が提げていた笠の内を指差す。

83

84

村長　これは見事な。
大きな松茸を取り出し、目の高さにあげ、匂いを嗅ぐ。
正三　こんな松茸が採れる山をダム湖にするのは惜しい。
村長　ニニニ
正三は松茸を一本手に取る。
正三　最高の松茸じゃ。これより上等の物は永久に生えぬ。
一同はため息。

正三　必イヤモニド以上いや。
徳子　その通り。
正三　こちらの篭に入れておいた。徳子婆ナヤンに食って貰うと思って。
松茸を三本篭より取り出し、食わせて四本を徳子に差し出す。
正三　食ってくれ。
徳子　ありがとと人（松茸を梱桶に入れる）
枝　特別扱いするな！
正三　きのこ採りしか知らぬワッチからの皆

85

約指輪いや。

花枝　早過ぎる。徳子婆ナヤンは後家になって半日が過ぎたばかり。死んだ旦那の死体を焼き場に運ぶ途中いや。

正三　ワッナ等の寿命は残り少い。若い者のように悠長なことは出来ぬ。

秋子　賛成！同感！

花枝　あきれた。アンタは後家になって三月足らず。

秋子　四十九日は終った。

千代は現われる。

村長　具合はー

千代　泣き止きず、一方はつっ立ったまま。

秋子　ハグすれば泣き止む。

千代　そんな度胸は無い。

村長　命拾いしたことを、お互に祝わねば。

千代　ワッナ等は野蛮人だ。日本人でないと罵っている。

村長　徳子婆ナヤン。

徳子　何いやーワッナは行かねばならぬ。焼

86

かれるのを待たせている。次の予定もあるので、早うすませたい。

村長　もう少しお待ち下さい。正三郎さんに回転焼とお茶を運んで下さい。

徳子　気の利かぬことじゃった。

作業台から回転焼と茶を運び、正三に手渡す。

正三　ありがとさん。

食べ、飲み始める。

村長　正三郎さん。ワッチが頼んでおいた物はこれじゃ。

正三　提げていた籠の一方を指差す。

村長　ありがとさん。どーれ。

籠を持ち上げる。

村長　重い。

少し離れた場所に置く。

正三　松茸。松茸買ってくれえ。町へ行ったら高くて食えぬぞう。

居合わせた者は、二、三本取り出し

て持つ。

正三　もっと持って行け。

千代　後から来る者に残さねば。

徳子　うまい物は分け合って食うものいや。

花枝　そういや。そう教しえられた。

明美は急ぎ足に登場。

明美　松葉、下さい。

正三　頼ってくれ。

村長　豊子ちゃんは、お元気ですか？

明美　ハイ。元気で、赤紙が来るのは当分先

のようで。

村長　それはよかった。うきい豆腐を作って貰える。

明美　頼まれた通りに大豆を植えた。電気柵を張ったので荒らされずにすんだ。

松男　ワッチも豆腐が食いたくて、大豆を植えた。

村長　それは有難い。

松男　百姓が町のスーパーで野菜を買うのは恥じいや。

全員沈黙。

松男　白菜とネギは完全有機肥料で栽培した。

秋子　松男叔さん、有難う。

花枝　アンタ、ここへ何しに来たのッ

村長　冬ごもりの準備は着々とはかどった。

春美　夫婦部屋が足りぬ。

五郎を見上げて頬笑み同意を求める。

村長　十分に用意した。

春美　先が読めぬのかッ

村長　エッッ　ここ先を読むのは村政の要。ワ

ッチは先の先を読んで来たがッ

五郎　ワッチは才マハンの頼みをきいた。

村長　そういやった。

五郎　春美ヂャンの頼みを断わるのか！

村長　判ったッ　ここ回った。

千代　困ることは友い。ワッチ等は分け合って暮らして来た。夫婦部屋を順番に使えばさい。

村長　問題は瞬間的に解決した。人生経験豊富な先輩に助けられた。

春夫　ハネームーンの老人を忘れるな。
村長　冬ごもり近くなって、駆け込みが増えそういや。春まで待って貰えぬかー
春夫　待てぬ。
正三　待てぬ。ワッチはジャックが死ぬのを62年待った。
村長　さーッッー（暗算する）すると、えいこから出たばかりの頃からー
正三　そういや。
千代　子供の頃から、徳子姉ちゃんをジャッ

ク義さんと取り合っていた。
花枝　おしくらきんじゅうでは、いつも取り合っていた。
千代　その場面、今も覚えている。
徳子　二人から押されて潰れそうになった。
花枝　いやではなかったのー
徳子　いやではなかったこと嬉しかった。
千代　寒い時は、誰言うとなく、おしくらまんじゅうを始めた。
明夫　あれをやると体の芯から暖まった。

秋子　子供心に、暖の合って心を許し合った
村の人間になると思っていた。
春夫　そして仲好くなった。
村長　小学生になると、入れてくれた。
千代　小さい子供は鼻水たらして、うらやま
しそうに見ていた。
秋子　松男春さん。なつかしいでしょうね
松男　なつかしいがミミミミ
花枝　（秋子に向って）松男春さんに声を掛け
るな。何をしに帰って来た。

90

千代　町にはマッチョが居らぬ。
秋子　おしくらまんじゅう、やりたい。ワ
ッショイ、ワッショイ、ワッショイ。
体を傾けリズミカルに波状的に肩で
押す動作。
春夫　ワッチもやりたい（上目使いに五郎を
見て）ねえ、押してくれるって
花枝　ワッチ等は骨が脆い。
秋子　大丈夫。春チャン達は骨が折れるほど
押せぬ。

90

村長　仲の好かった昔の村に戻って、子供に戻って、おしくらまんじゅをやろう。おしくらまんじゅうは後世に伝えるべき無形文化遺産。

春夫　難しいことを言うな。

千代　昔の子供の遊びを学者に見せたい。

村長　仲間に入れろ。数は多いほど好い。押して押されたら、悪い気は押し出される。

千代　それでは。

家に入る。

村長　皆の家、集って下され。

一同は村長の前に集まる。

千代に連れられて阿部と学者は現われる。

学者　取り乱してすみません。

村長　取り乱さぬ方が異常。

千代　その通り。

村長　春夫さんの座を放してくれ。

春夫　押す時も、押される時も一緒。

村長　知り合う前の昔に戻ってくれ。
　　者共は五郎の死を放すが不満である。
長　補償。
補償　ヘイ。
村長　そこの角を背にして立て。
補償　ヘイ。
　　家の道角となった隅に立つ。
村長　県知事閣下の代理は、その横へ。
阿部　エッヘー　私がヘー
村長　村をあげての儀式に参列して頂かねば

なりません。
　　阿部は補償の横に立つ。
村長　こちらを向いて下され。腹は不回。
阿部　エッヘー
村長　小学校女子生徒、内に入って下され。
　　婆さん達は補償と阿部の前に立つ。
　　受者は千代に引かれる。
受者　何をするんですか？
千代　おしくらまんじゅう。
受者　どんなものですか？

千代　先刻話した。やれば判る。
学者　撮影して頂けませんか？
千代　やりとうない。入った。入った。
　学者を姿さん達の間に入れる。
学者　コワーイ！
村長　男子生徒は肥後守を磨めて。
　五郎はポケットを探しかめる。
五郎　安全、（銃を外して横に置く）
村長　わが村は、山のガラパコス島。おしくらまんじゅうが遅くまで残った。

93

春夫　演説は要らないの。
村長　掛け声は、特に松男様さんに取って頂きます。よろしいでしょうか？
　一同は拍手し、笑う。
松男　それでは、ご指名を受け、各員ある車責を責任でやらせて頂きます。
　柄杓を立てる。
村長　外からの押し役は、五郎様さん。正三様さんとワッチ。位置について。
　三人は姿さん達の外側から押す構え

93

村長　内は色の白い女の子、白あんしゃ。
　　婆さん達は笑う。
村長　松男春さん。頼みます。
松男　それではここおしくらまんじゅう
　　ワッショイ（柄杓を前に振る。以下省略）
一同　ワッショイ。
　　村長、五郎、正三は婆さん達を押す。
学者　痛いー！痛いー！
松男　赤子泣いても喜取るか。ワッショイ。
一同　ワッショイ。

松男　ワッショイ。
一同　ワッショイ。
学者　助けてー！
松男　ワッショイ。
一同　ワッショイ。
春美　ストップ。ストップ。
松男　今さらストップめぬ。ワッショイ。
　　春夫は婆さん達をかき分けて出て、
　　ナホミに成り寄り抱きあげる。
一同　ワッショイ。

松男　白あん潰せ。ワッショイ。
一同　ワッショイ。
　　婆さん達の焼しそうな悲鳴。
松男　つぶあん潰せ。ワッショイ。
一同　ワッショイ。
松男　もうひとつ
一同　ワッショイ。
学者　痛いーーー止めてえーー
松男　止めてたまるか、ワッショイ。
一同　ワッショイ。

花枝　触るなー
松男　触るな。ワッショイ。
一同　ワッショイ。
松男　最後に。ワッショイ。
一同　ワッショイ。
松男　おまけにワッショイ。
一同　ワッショイ。
松男　押し方、止めえ。これで十分だ。
　　村長、五郎、正三が遅つと婆さん達は顔の汗をぬぐいながら去る。

村長　徳子ちゃん・ご感想は？

徳子　正三義さんでもよかった。

一同は笑う。

学者はうずくまっている。

千代　大丈夫？立って。

学者は立ち上る。

学者　救急車をお願いします。

千代　どうしたの？

学者　肋骨を骨折した。

千代　深呼吸（両手を大きく開く）

学者は深呼吸。

千代　折れてない。

阿部　大丈夫ですか？

千代　折れてたら、どうするの？

阿部　ここ、ここ病院へ、ここ、ここ

正三　山には漢方薬が生えている。ミツブす

れば治る。

花枝は補償に平手打ち。

一同は笑う。

明美　面白かった。

97

春夫　子供に戻れた。

千代　ワッチ等は、おしくらまんじゅうで遊んだ子供じゃった。

村長　その通り。子供の頃は仲好く遊んだ仲。仲好くなれる。

春夫　朝の授業前や休みの時間になると教室で、よくやったもんじゃ。

五郎　先生を内に入れて押したこともある。おしくらまんじゅうが好きな先生が居た。

正三　生徒が寄ってくると、学級全員で、

朝令前には学校全員で、天突き体操をやった。

秋子　やりたーいーやろうよ。ヨイミヨ　ヨイミヨ。

天突き体操を行なう。

正三　やろう。

学者　あのうこどんな体操でしょうか？

正三　学校の授業でやったもんじゃ。今、秋子ちゃんがやったように、天を突き上げる運動じゃ。離れてやるので肋骨が折れ

98

ぬ。

秋子　皆さーん。やりましょう！

一同　やろう。

村長　号令は正三義さんに掛けて頂いて、よろしいでしょうか？

一同　異議なし。

正三は中央に出て一同に面する。

正三　喜んでやらせて頂きます。級長に選ばれたように嬉しい。ワッチ等の村立小学校卒業の皆様、右と左に半々に分れて下さい。

一同は左右に分れる。

松男は柄杓を持って離れた位置に立つ。

春美はナホミを抱いている。

正三　遠い昔にやったこと。皆の動きが揃わぬかもしれぬ。打ち合わせをしたい。こちら側（下手を指差す）を赤組、こちら側（上手を指差す）を白組とする。ワッチが「用意」と号令すると、このように

天を突く構えを取って頂く。
両手を耳の高さに上げ、膝を曲げてしゃがます。

正三　ワッナの「リーレ」の号令で、赤組は「ヨイショ」の掛け声を上げて、両膝と両手を伸ばす。バンザイになる。すぐ構えに戻る。次は白組となる。赤白組は繰り返す。阿部さん、学者さん、判りますか？

阿部　ハイ。判りますが、私は当村の小学校卒業ではないので、応援をさせて頂きます（列を離れようとする）

村長　待った。わが村の最後の儀式に参加しなかったことが県知事閣下のお耳に入ったらこう想像するだけもおそろしい。
阿部は下を向いて列の中にとどまる

若矢　ワッナはナホシを持ち上げる。

村長　全員参加でやうねばならぬ。正三義さん。頼みます。

正三　それではここ天突き体操、用意。

一同は構える。

正三　天突き体操、天まで届け。ソーレ。

赤組　ヨイショ（天を突く）

白組　ヨイショ（天を突く）

赤組　ヨイショ（天を突く）

白組　ヨイショ（天を突く）

正三は両手を頭の上で左右に振って交叉させ、停止のサインを送る。

正三　押し方、止めえ。

一同は中止し、立つ。

村長はステージ中央に進み出て客席に向く（礼）

村長　ここで、皆様のお許しを得て、せえ居を一時中断します。ご来場いただき、ありがとうございます。ご来場のお客様に、天突き体操に出演して頂きたく、役者及び劇場スタッフを代表して、お願い申し上げます（礼）ご希望の方は舞台にお上り下さい。どうぞ！！！どのように出演して頂くかでございますが、顔客席左側

101

のお客様は赤組に、右側のお客様は白組に合わせて、ヨイショと掛け声を掛け、天突き体操を続けて十回行って頂きます。それでは席をお立ちください。シートを上げたり通路に出ると動きやすくなります。スタッフ、ステージに出て下さい。

準備が終ったことを確認する。

村長　正三係さん、号令をお願いします。

正三　各員ある号令を掛ける役目をやらせて頂きます。（礼）天突き体操、用意、天まで届け。ソーレ！

松男は椅子を水平に持ち上下する。

春夫はナポミを抱いて上下する。

天突き体操を十回行なう。

山村　ヨイショ。20回。

正三は両手を上げ、左右に振って停止の合図を送る。

正三　押し方、止めえーッ。

停止したことを確認する。

正三　ありがとうございました（後へ下る）

102

村長は中央へ進み出る。

村長　ご出演、ありがとうございます。お席へお戻り下さい。着席を願います。

村長は観客の着席を確認する。

村長　芝居を再開します。県知事閣下特命代理の阿部様、前へ。どうぞ。

阿部　エッ？私が？

村長　どうぞ、前へ出て下さい。

阿部は不安そうに前に出る。次に何をさせるか不安そうである。

村長　県知事閣下特命代理の阿部様の参加により、当村の無形文化財が盛大に再現できました。厚くお礼を申し上げます。

一同は拍手。

村長　県知事閣下特命代理の阿部様に対し、村民一同、感謝の心をこめて、お土産を献上いたします。

横に置かれていた箱を差し出す。

阿部　あのうっ、ここれを、私に？

村長　少し重いが、土産は多いほど好い。

阿部　こんなに頂戴してはいいのか

村長　部長、副知事へと出世される実力者に当村を視察して頂くのは非常に名誉なことでございます。

花枝　スーパーで買ったら、10万円以上。一回は呆気に取られ沈黙。顔を見合わし小さい声で話す。

村長　知事閣下をはじめ、部長、課長、係長様に御視察していただければ幸甚でございます。

103

阿部　ありがとうございます。仰せの通りに実施いたします。

村長　その節、当村の現況をご報告して頂けますようお願い申し上げます。

阿部　ハイ。報告いたします。

村長　ダム建設反対派が、村を立ち退かぬと宣言して、決死の行動に出たり、山に立て籠りゲリラ戦を始めると、ダム工事は開始できません。

阿部　その様な兆候がございますか？

104

村長　あるから、心配している。対立は深刻。

阿部　ここに

村長は沈黙し阿部の反能を見る。

村長　阻止行動が起きないよう、ワッサは心血を注いでいる。この状況もご報告願いたい。

阿部　了解いたしました。

村長　ご体験された通り、この村の人間は世つかちで、生きたままに火葬をやりかねない。

阿部　あっ、ハイ。

村長　ダム建設賛成と反対派の激しい憎しみはご承知の通り。ワッサは、仲直りを目指して、村に残った老人達を、医師が去った鉄筋コンクリート製の診療所に集めて、冬籠りをしようとして居ります。このこともご報告下さい。

阿部　ハイ。報告いたします。

村長　診療所に集めなければ、凍えて孤独死する状況下になります。

105

阿部　ここ。

村長　ご承知のように当村には予算が無い。暖房と入浴のために、灯油をドラム缶で30本、必要。

阿部　ここ。

村長　雪解けまで正ケ月間120日の食料費200万円、不足する。

阿部　ここ。

村長　この二件を報告し、予算を付けて頂けるよう、伏してお願い申し上げます。

突然、土下座し額を地面に着ける。

阿部　あのうここお立ち下さいここ。あのう、村には予算を付けることは出来ません。

村長　貴殿には、その実力があると見込んでのお願いをしております。

阿部　あのうこここれは、お返しします。

正三　村長に土下座させて、断るのかい、

梅男　土産を突き返して、マッチ等に火をかせた（柄杓で地面を打って音を立てる）

春夫　自警団団長の出番。

106

五郎　了解。
急いで銃を取り阿部に接近する。
村長　此所で何かあったら、アニタの出世に響く。お役人らしく、事忍れ主義を取られてはこ、
阿部　ここと
村長　ワッチ等の頼みをきいてくれた。ありがとうございます。
阿部　同りました。
一同　ありがとうございます。（拍手）

村長は立ち上り、学者に向く。
千代は学者を前へ押し出す。
村長　学者先生。天国から生還された宇宙飛行士さながらの体験をされ、学術研究も大いに捗ったと思われます。
学者　ハイ。閻魔大王から入国を拒否され、強制送還されました。
村長　この村は都会の水道のために犠牲にされた。ダム難民と伝えて下され。
学者　ハイ。伝えることが私の使命です。

村長　村民は極力にさって、先祖から受け継いで来た畑と山を奪われ、ご先祖様に申し訳ないと思っている。

学者　ハイ。よく承知しております。

村長　ワッチ等は、この村に住んで助け合って来たから生きられた。町では生きられぬ。

学者　ここ。

村長　町に移住した後も、国や県から、その後の面倒を見て貰わねば生きられぬ。このことも書いて下され。

春夫　今頃になって、本音を言うな。

村長　本音でものを言わねばならぬ時が今じゃ。学者はものごとの核心を見抜く。下手な小細工はやらぬ方が好い。ワッチ等の必死さを判って貰えるか。

学者　十分に判っております。

村長　さてここ残りの行事は、お宮参り。

千代　この村で生れた赤チャン、この村で育つ赤チャンは必ず、氏神様にお参りする

108

ことになっている。

一同　そういや。そして村の人間になる。

村長　それでは、一同揃ってお墓参りに行きましょう。

秋子　ワッチは、これで。

村長　ジャック叔さんを待たせて置いても拉致されるし心配はない。

千代　喪中の者が祝いごとに入れば、めでたさも増す。

村長　お墓参りの次は、ジャック叔さんの野辺送りをしよう。

秋子　ありがとうございます。

村長　松男、大根はこの場に残して置いて、野辺送りが終ってから、持ち帰って下さい。それでは、参りましょう。

ナホミを抱いた春夫を先頭に行列が出来る。

列の後尾に、村長、正三、松男が立っている。松男の横に秋子が立つ。

列は動き始める。秋子松男を招く。

109

村長　お宮参りの行列に入るのは久し振りじゃ。

正三　遠い昔のことじゃった。

列は退場。

村長は歩るき始めて、立ち止り、山を見回す。

村長　紅葉がきれいじゃ。今年は一段と鮮やかに見える。来年はもう見られぬ。

山を指差し陵線に沿って指先は緩やかに上下する。峰でしばらく静止し、

―休を一回転する。―

村長　此所からあのはるかな峰々まで肉牛の放牧地にしたかった。焼畑を牧草地に変えれば、巨大な放牧場になった。

松男　ワッチ等は焼畑を作るのは得意じゃ。

村長　焼畑の許可が得られなければ、計画は実現できぬ。

正三　山国の日本は牧畜を盛んに出来る可能性がある。

村長　しかし、若者が村を出て、老人が孤独

110

死すれば村は死に絶える。その前に、村をダム湖に高く売り付け、老人達を町に移住させる決心をした。交渉を有利にするため、激しい反対闘争をやって貰った。

松男　反対が無ければ貰いは少い。

村長　お三方には深く感謝申し上げる。

五郎　裏切られたと何回も疑った。証拠を掴んで射ち殺ろす心算いやった。

松男　ワッチは野垂で溺れさせようと考えた。

村長　ワッチを死めるため、国会の議員出馬とか、賄賂を受け取らせようと、挑発っていた。

正三　オマハンが無数だったから、この大事業に成功した。

五郎　貪欲な政治家に敵なし。

松男　そんな政治家は居らぬ。

正三　反対闘争は、利権に群がるハイエナ共を見ると、本気に変った。しかし、ワッチは村長を信用していた。

五郎　心からの反対派を欺いた。胸が痛い。

正三　墓場まで持って行かねばならぬ秘密じゃ。

村長　密約を守ってくれると確信していたから強気に出れた。そのおかげで、有利な取り引きが出来た。

松男　反対をやり過ぎて、中止になるかと心配した。

村長　税金の使い途は一度決めると中止できぬ。

正三　見事に読み切った。天晴れじゃ。

松男　オマハニは煮ても焼いても食えぬ男。

村長　それは、お互様。

松男　松茸の使い方は見事いやった。

五郎　（前方を指差す）松男様さん。見ろ。秋子逆ナヤンが、早く来いと呼んでいる。

四人は歩き始める。

村長　これからは仲直りして貰わねばならぬ。力と智恵を貸して下され。

―完―